審 査 結 果 の 要 旨

論文題目「東南アジア地域における民族観光の可能性
—同一型民族観光から考えるホストとゲストのあり方—」

学位申請者　岡山　奈央

本論文は、東南アジアの観光を、フィールドワークと広範な文献調査に基づいて総合的・包括的に捉えて、その類型化と分析を行うことで、同地域の今後の観光の方向性を示唆することを目的としている（第1章）。まず、国際観光一般と東南アジア観光の変遷とともに、観光理論並びに東南アジア観光の研究史を論じ（第2章）、続いて、民族観光に「人々の現在の生活やアイデンティティに係る社会・文化的な事象を観光対象とするもの」という定義を与え、これに基づいて東南アジアの民族観光を精査し、従来見られた問題を抽出している（第3章）。次に、東南アジアの民族観光を、ホスト（観光受容者）が自文化を脚色して見せる「脚色型」と、ほとんど脚色がない「同一型」の両極に区分し、その中間に、脚色はあるが文化の一定部分しかゲスト（観光者）に見せない「分離型」を置く。それぞれの典型が、マレーシアのサラワク州、ブルネイ、インドネシアのバリ島である。著者が注目するのは、脚色型においては、ホストがゲスト（観光者）のまなざしに従属的であるのに対して、同一型では、ホスト・ゲスト間で相互のまなざしが対等に機能する点であり（第4章）、その発展基盤と展開の歴史を考察した後（第5、6章）、いかなる観光形態でも、まなざしの双方向性を重視し、ホストの文化的アイデンティティを保持し、ホスト・ゲストが互いに学びあうことのできる観光を樹立することの必要性を論じて（第7章）、その実現は、多元的な文化・社会の保持、人類諸文化の共生・共存に繋がるであろうと結論づけている。

本論文の学術的価値は、主として以下の3点において高く評価される。第1に、現地調査だけでなく、総計313件（内197件が外国語文献）の文献を広く渉猟して研究史を精査し、総合性と類型化の不足を適確に指摘し、本論文が観光学研究に貢献しうることを明確に示した点である。第2に、本論文の基本概念である「民族観光」について、類似した概念の含意を精査しながら、著者の分析ツールとして明確に定義した点であり、著者の論理的な考察と分析概念を明確化しようとする学的努力が高く評価できる。第3に、このような手続きによって行われた、東南アジア観光の包括的把握と3分類は、事例の収集・整理と的確な分析に基づいた説得力あるものであり、特に、ブルネイで新しく誕生し発展しつつある、「同一型」観光に、ホストの文化的アイデンティティの持続可能性を見出し、その基礎をホスト・ゲストのまなざしの双方向性にあるとして、東南アジア観光のみならず、民族観光一般について今後の方向性を示唆した意義は極めて大である。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。

したがって、申請者　岡山奈央は東海大学博士（文学）の学位を授与されるに値すると判断した。

論 文 審 査 委 員

主査	経済学修士	立原　繁	観光学部教授（文学研究科文明研究専攻）
委員	商 学 修 士	浅野　清彦	政治経済学部教授（文学研究科文明研究専攻）
委員	文 学 修 士	横山　玲子	観光学部教授（文学研究科文明研究専攻）
委員	社会学修士	松本　亮三	東海大学名誉教授
委員	社会学修士	加藤　泰	東海大学非常勤講師